

# 多様なアジアを知るための書

アジアは多様である。それは、あたかも重層化されたモザイクの集積体としてあるかのようなものである。また今日、アジアは地理的空間としてあるだけではない。この島国に住む我々の生活の身近な所にも、アジアの人・モノが多く存在しており、我々は日常生活の中でアジアを考える必要に迫られているのである。本書はそうした多様なアジアを考える上でのヒントを与えてくれるものといえる。本書の構成は以下の通りである。

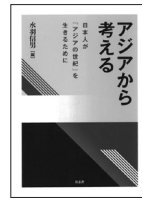
はじめに

総論 水羽信男 「開かれたアジア論の深化のために——本書のねらいと構成」

第一部 アジア認識の再構築のために——「外」からみる日本・アジア

## 嗟 峨 隆

水羽信男編  
アジアから考える  
日本人が「アジアの世紀」を  
生きるために



A5判 286頁  
有志舎  
[本体 2,800円 + 税]

第一章 大池真知子 「アフリカでビジネスと紛争にかかわる日本人たち——日本の現代小説にみるアフリカのイメージ」、第二章 青木利夫 「ラテンアメリカの植民地支配と独立の経験——植民地近代を考える」、第三章 三木直大 「雑誌『島嶼邊縁』と一九九〇年代前半期台湾の文化論」、第四章 川口高行 「日本における『台湾』／台湾における『日本』」、第五章 布川弘 「ラシヤワーのアジア認識と日本」、第六章 西佳代 「放射能とともに生きる」——残留放射能問題と戦後の日米貝類貿易」

第二部 日本とアジアの交流・比較——「アジア」の実相  
第七章 金子肇 「中国の憲法制定事業と日本」、第八章 水羽信男 「大正期東京の中国人留学生」、第九章 丸田

- 孝志「竈神と毛沢東像——戦争・大衆動員・民間信仰」、  
第一〇章 黄自進「和解への道——日中戦争の再検討」、  
第十一章 長坂格「アジアの中を移動する女性たち——  
結婚で日本に移住したフィリピンの女性たち」、第二二  
章 八尾隆生「近現代ベトナムへの日本人の関与」

あとがき

第一部でいう「外」とは、アジア以外の地域あるいはアジア内部の他者を指し、彼らの視座から相対化されたアジアを意味する。各章の著者たちの指摘から考えさせられることは、他者の立場を通すことによって明確となる我々日本人のアジアに対する認識の歪み、すなわち自分たちに都合よく解釈されていたアジアであったことである。例えば、小説という形で「縁もゆかりもない」アフリカについて自由奔放に描く様子は、日本人の他者イメージの反映であって、それは実に我々とアジアの関係性を照らし出す鏡でもあるのだし（第一章）、中南米の地域に「ラテン」という先住民に無縁な名称を与え、且つ白人支配者が自らを文明の使徒として、先住民社会の遅れを解消することを使命と考えていたことなどは、かつての日本とアジアとの関係を彷彿とさせるものでもある（第二章）。それに比して、ライシャワー再評価と残留放射能問題についての論考（第五章、第六章）は、それらを媒介として日

本人の現在の思想・文化傾向、そして科学的数値優先に対する批判となり得るものである。このような他者を通じてのアジア問題へのアプローチは、あまり一般的ではないが、アジアの持つ問題を考えるに当たっては意外な一面を知る上で興味深いものがある。

台湾を「外」と分類することには違和感を持つ人もいるだろう。しかし、そのアイデンティティをめぐる問題は、中国と日本の影響を相対化するための「他者」たり得るものである。すなわち、本書の指摘からすれば、台湾は対中国という側面と自らの中に抱える少数者との関係の間にあつて、二重の他者として存在することが理解されるのである（第三章）。他方において、近年の台湾映画の中には自らのアイデンティティを問う作品が多く見られる。その場合、しばしば日本支配の時代が題材として扱われるのだが、日本語教育世代を親日の象徴とする一部の見方に対して、日本語では「語られなかった経験」の重要性についての本書の指摘は「親日」の背後にあるものを考えさせるものである（第四章）。また著者は、魏徳聖の作品「セデック・バレ」をして、多文化の融合する土地としての台湾という存在を我々に提示しているかのようにあるとするが、これは興味深い指摘である。

第二部は中国近現代史と東南アジアを扱った論考で構成さ

れている。中国近現代史の研究は、中共的歴史観から脱却して久しいものがあるが、本書の著者たちの関心も中華民国史の多面性に即したものとなっている。中でも、憲政史は現代政治との関わりから関心を惹く分野となっているが、本書では一九三六年の「五五憲草」と中共による一九五四年憲法制定への日本人の対応が扱われている（第七章）。前者は同時代の優れた観察として、後者は冷戦という緊張した時代状況の中で、日本側が冷静かつ柔軟な見方をしていたとして高く評価されるが、それは今日の状況の中でも参考とすべきものでもある。憲政と同様に、リベラリズムもまた中国の現代的課題に繋がるテーマであることはいままでもない。本書で取り上げられた施存統という人物は興味深い事例である。すなわち、彼の思想には個の尊厳を最重視する発想があり、ナショナリズムを相対化する視点が見られたのである（第八章）。そうした発想が、日本での生活の中で育まれたことを知る時、我々は中国のみならず今日の日本における民主主義の在り方とナショナリズムについて再検討するに当たっての素材となし得るだろう。

日中戦争期間中に中国共産党が力量を強めた最大の要因は、農民大衆の支持を獲得したことである。本書ではそのことを、階級意識の啓発や利益誘導だけでなく、人々の習慣や

信仰形態といった情緒的側面への訴えかけから分析する（第九章）。烈士の追悼で興味深いのは、それが農民の宗族観念や家族観念に配慮した方式で行われたということである。そこには、「お国のため」や「階級のため」とは無縁な戦死者顕彰のシステムがあった。それは、ナショナリズムが人為の産物であることを実感させられる内容である。このような共産党の問題も含めて、日中戦争の再検討は今日の最も重視されるテーマの一つであるといえる。これについて本書では、戦争が長期的に計画、運営された結果ではなく、偶発的な事変の連続という悪循環の中で生まれた結果であるという認識から、事変が何故連続して発生したのかを再検証する必要があると説き、これまでの日本・中国・台湾の共同研究の紹介を行っている（第一〇章）。確かに、この問題は民族和解のための極めて重要な鍵であり、著者の意図と方向性は十分に理解できる。更には、満洲開発を日中戦争の一つの軸としようとする考えは、研究に厚みを加えることになるであろう。今後の具体的成果を期待したい。

日本と東南アジアの関係の中で、本書が取り上げるのはフィリピンとベトナムである。在日フィリピン人女性が抱える生活上の問題は、我々の日常生活と隣り合わせになったアジア問題の存在を認識させるものである（第十一章）。彼女ら

の生活は、日本社会への適応と同時に、フィリピンの家族との関係維持を支援する存在としての夫の役割の重要さを浮き上げさせる。彼女らの生活は、夫との関係性如何でどのようになっても変わり得る不確実なものなのである。個々の問題には個々の解決策しかないのだが、我々はこうした研究を通じてその問題の実態を知り、他者への社会的寛容度を高めていく必要があるだろう。最後に、ベトナム近現代における古典籍の流転を基に、日本がそれにどのように関わるようになったかが論じられている(第二章)。著者によれば、現在のベトナムにおいては前近代史学は「ぶちぎりの負け組」の分野であり、史料を読める人も限られるほどの人材不足だという。しかし、同時にそれは日本人を始めとする外国人が研究に貢献できる余地があるということでもあり、そこから新たな交流の始まりも期待できるのである。

右で簡単に紹介したことからも分かるように、本書の主題とするところは多岐にわたり、それぞれの著者のアプローチの仕方や提起する内容も多様である。しかし、様々な形で提起される中から共通して感じられることは、直接・間接の違いはあれ、その多くが日本の過去と現在に関わるものとなっていることである。この点では、編者が「はじめに」で触れた問題意識が本書全体に行き渡ったという印象を持つ。それ

では、日本にとってアジアは何であった(ある)のか。この問いは、日本はアジアであるのかというテーマにも関わるだろう。明治以降の潮流である興亜と脱亜は、自らに刻印されたアジア性を前面に出すか、或いはそれを意図的に否定するかの違いでしかなく、陽画と陰画の関係にあったことは今や常識である。そうであれば、近代以降の日本はアジア性を共有しつつ、別のルートをたどって「侵亜」に至ったことになる。しかし敗戦によって、日本は主体性を放棄してアメリカと一体化したこともあって、アジアを積極的に語らなくなった。逆に、日本はアジアにとって何者であるのかを問う努力があった。だが、それは一部を除いてさほど大きな潮流とはならなかった。そのような中で、十数年ほど前から、本来の意図とは全くかけ離れた形で「脱亜」という言葉が頻繁に使われるようになり、中国と朝鮮半島を指して「特定アジア」と称し、露骨なヘイト・スピーチがなされるようになっていく。そして、それを増幅させるような形で日本礼讃の声が溢れている。こうした現状を乗り越えて、真の和解と共存を作り出すためには、日本にとってのアジア／アジアにとっての日本を、基礎的な部分から問い直す作業が必要であるのではないだろうか。本書がそうした意図を持って読まれることを期待するものがある。

(さがたかし 静岡県立大学名誉教授)